

琉球大学学術リポジトリ

システム教育学のすすめII： 凶形モデルの再構築とシステム論から見たコーディネーターの役割

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2018-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 茂樹, 城間, 園子, 津波, 桂和, 佐和田, 聡, Ogata, Shigeki, Shiroma, Sonoko, Tuha, Yoshikazu, Sawada, Akira メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/39187

システム教育学のすすめ II

—図形モデルの再構築とシステム論から見たコーディネーターの役割—

緒方茂樹*、城間園子**、津波桂和***、佐和田聡****

Technical Approach for Systems Education II

— Reconstruction of New Temporal and Spatial Models and Function
of the Coordinator Based on System Methods —

Shigeki OGATA, Sonoko SHIROMA, Yoshikazu TUHA, Akira SAWADA

抄録

本研究ではこれまでに提唱してきた「システム教育学」の中核をなす図形モデルの再構築を行なった。まず特別支援教育におけるネットワークシステム構築に関する図形モデルとして「基本モデル」を提案した。従来提案してきた「空間モデル」は結果的にこの基本モデルと同一のものとなった。さらに時間軸に沿った連携のあり方について、基本モデルに時間情報を付加した上で「時間モデル」を再提案した。さらに本稿では、特にコーディネーターの役割に焦点を当て、システム論に基づいて今回再構築したモデルに当てはめを行った。得られた所見から、例えば関係諸機関間の連携については、コーディネーターが境界関係システムとして位置付けられること、その具体的な役割として「つなぐ」ということが主眼とされるべきことなどについて指摘した。さらに境界関係システムに関わる具体的な課題の一つとして、学齢前における保育所(園)、認定こども園におけるコーディネーターの不在などの課題についてもまた明らかにした。認定こども園の設置数増加に見られるような保育制度の改革の中、いわゆる気になる子の早期発見と早期対応についてもまた、時間連携の観点から今後重点的に取り組むべき課題の一つであることを指摘した。

1. はじめに

「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」の最終報告(中央審議会、2005年)⁵⁾では、「総合的な支援体制整備に当たっては、生徒指導主事、養護教諭、スクールカウンセラー、学校医などの学校内の人的リソースはもとより医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等の外部の専門家の総合的な活用を図ることや福祉、医療、労働などの関係諸機関等との連携協力を進める必要がある。さらに、親の会やNPO

等との連携を図り、全体として有機的なネットワークを構築する必要がある」とされている。インクルーシブ教育の重要性が叫ばれる現在、学校は関係諸機関と連携協力を強め、有機的なネットワークシステムを構築することで支援体制全体を支える専門性を強化していくことが求められているといえよう^{1) 14)}。例えば、学校関係者と保護者が共に協力しながら積極的に上述した外部の関係諸機関を利用した相談を受けることで子どもに対する支援は多面的になり、より効果的なものになる

*琉球大学教育学部

**琉球大学高教職実践専攻

***やえせ高等支援学校

****宮古特別支援学校

と考えられる^{2) 3)}。後述するように、そのためには校内の特別支援教育コーディネーターを窓口とし、関係諸機関とのスムーズな連携が図れるようなネットワークシステムの構築が急務である。これらのことを踏まえて、本研究では便宜的に外部の関連分野を医療・保健、福祉、労働の3分野とし、これに教育を含めた4分野を特別支援教育ネットワークシステム構築の柱として考えることとする⁸⁾。

先行研究では「システム教育学」という新たなアプローチを提唱した⁹⁾。これは教育をシステム論の観点からみようとすものであり、システム工学⁶⁾における考え方を参考にしている。本研究ではこれまで、「システム」と「組織」という言葉について、経営心理学や社会心理学で使われる用語の意味を考慮して使用してきたが、未だ明確な定義を行っていない^{4) 7) 9) 16)}。本稿ではこれまでの研究結果を踏まえて、まず「ユニット(Unit)」という基本単位を定義した上で、「組織」と「システム」について、改めて以下のように定義する。但し、生物学でいうところの「組織(tissue)」は、本研究で扱う内容とは明らかに異なることから例外として除外した。

- ・ユニット：原則として複数の要素から構成された単位
- ・組織：二つ以上のユニットの集まりで、それぞれのユニットが共通の目的をもち、上下関係をもちながら役割を分担し、機能している状態である。さらにその目的は原則としてより上位のユニットからの指示に基づいて構成される。
- ・システム：二つ以上のユニットの集まりで、それぞれのユニットが共通の目的をもちながら並列的に役割を分担し、機能している状態である。さらにその目的は原則としてユニット間の調整機能に基づいて構成される。

ここでユニットを「原則として複数」と考えたことは特別支援教育のティームティーチングにみられるように、最低単位は複数であることが望ましいという考えに基づいている。今回提案した定

義は、先行研究で述べた「システム」と「組織」に関わる概念の関係性に修正を加えたものである。「組織」の最大の特徴を上下関係としたことは、上意下達による命令系統の画一化がその基本にあるという考えに基づいている。一方「システム」は並列的に役割を分担することに最大の特徴があり、それぞれのユニットの持つ役割を柔軟かつ最大限に発揮するために最も望ましい状態であると考えている。ここで、仮にユニットの要素が組織であっても、それが並列的に機能していればシステムとなり、逆にユニットの要素がシステムであっても、上下関係を持って機能している場合には組織となる。その意味で前述したように、先行研究⁹⁾で行った定義をやや修正し、今回組織とシステムはその概念において大小の差は無いものとした。

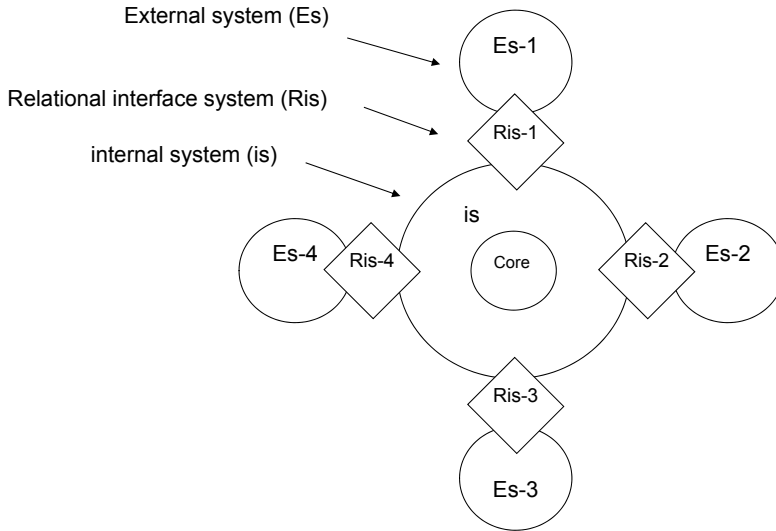
2. これまで作成してきた図形モデルの整理と再編成

ここではこれまで提案してきたシステム教育学の考え方に基づいて、横断的、縦断的連携に関する図形モデルについて改めて整理する。先行研究⁹⁾では、まず横断的な空間モデル(空間型)と縦断的な時間モデル(時間型)の二種を提案したが、特に後者についてはフローチャートによって示される支援のいわば手順を示したものであった。その後の研究成果に基づいて次の段階では、時間連携についても空間連携と同様に図形モデルの形式に変更した¹⁰⁾。今回はこれらの図形モデルを整理した上で再構築し、最初に提案した空間モデルについては改めて基本モデルとして捉え直すこととした。

図1にシステム教育学の図形モデルについて、緒方ら(2008)⁹⁾(2013)¹⁰⁾を基に、今回改めて再構成した基本モデルを示す。ここでは対象となるターゲットを「核(Core)」として中心におき、その対象が所属する最も近いリソースを内部システム(Internal systems: Is)とする。一方外部で関係する様々なリソースを外部システム(External systems: Es)とし、さらに内部・外部の間を「媒体」として繋ぐ役割を境界関係システム(Relational interface systems: Ris)として位置づける。後述するようにこれは先行研究で示し

た時間モデルと形式は同一であるが、今回提案する時間モデルの基礎になることもあり、今後は区別のために便宜上「基本モデル」と呼ぶこととした。

SEN Networking System “Basement & Spatial Models” (ver.2.0.0. Oct.04.'17.)



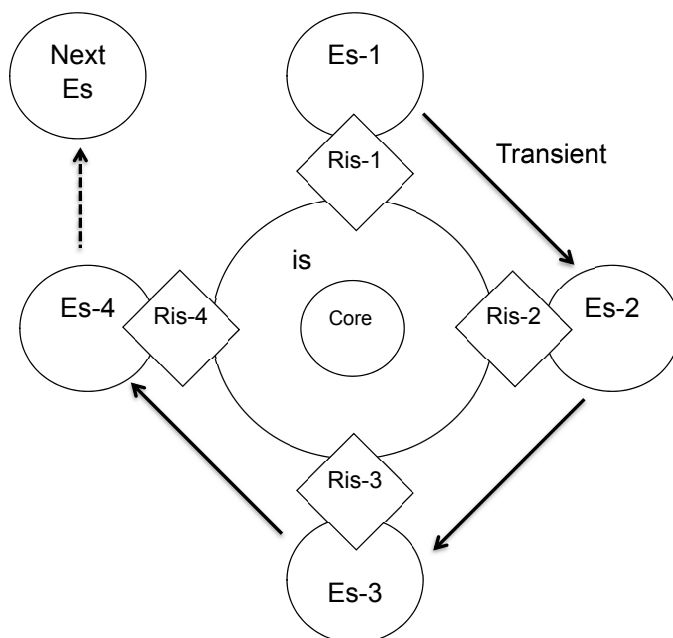
Core: 核、Is : 内部システム、Ris : 境界関係システム、Es : 外部システム

図1. 今回提案した基本モデルと空間連携の図形モデル (緒方ら 2008⁹⁾ による)
(結果的に基本モデルと空間モデルは同一の図形モデルとする)

この基本モデルに基づいて、改めて空間モデルと時間モデルの再構成を行なった。例えば、焦点を当てる核 (Core) に子ども、内部システム (Is) に保護者を考えた場合、まず核となる子どもの「ある特定時期における関係諸機関との連携」を考えるのであれば、空間連携を意識した空間モデルの当てはめをする。例えば医療分野との連携であれば病院など、福祉・保険分野との連携であれば児童相談所や療育機関など、教育分野との連携であれば学校や幼稚園、教育委員会などがそれぞれ外部システム (Es) となりうる。さらに連携モデルを考える上で最も重要な境界関係システム (Ris) については、後で詳細に述べるコー

ディネーターなどがその代表的なものとなる。この空間モデルについては結果的に前述した基本モデルと同一のものとなった (図1)。

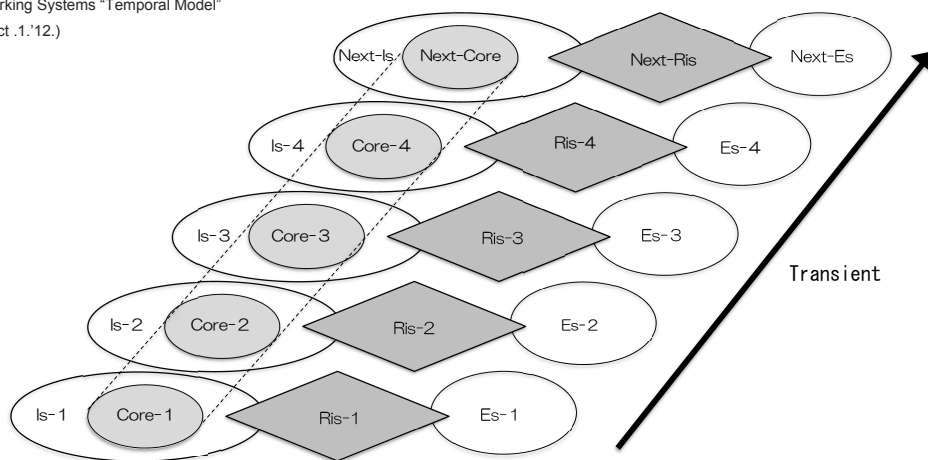
一方、核となる子どもの成長過程など「時間経過を追った関係諸機関との連携」を考えるのであれば、時間連携を意識した時間モデルの当てはめをする。この時間モデルは、上述した基本モデルに時間に関わる情報を付加したものである (図2)。この時間モデルはその後の研究成果に基づいて、基本モデルで並列的に扱われていた外部システム (Es) を時間軸上に並べることで時間差をつけ、最終的には一つ一つ進んでいくイメージに変更した (図3、緒方ら、2013)¹⁰⁾。この時間軸の



Core: 核、Is : 内部システム、Ris : 境界関係システム、Es : 外部システム

図2. 時間情報を付加した基本モデルから時間モデルへの移行

SNE Networking Systems "Temporal Model"
(ver.1.05 Oct.1.'12.)



Core: 核、Is : 内部システム、Ris : 境界関係システム、Es : 外部システム

図3. 時間連携の図形モデル (緒方ら 2012¹⁰⁾ 一部改編)

流れは、例えば子どもの成長過程を追った場合には、その子のライフステージと重なっていくと考えられる。ここで外部システム (Es) としては、乳幼児期には保育所 (園)、幼稚園や認定こども園が、また児童期になれば学校が、さらに成人していけば就労などがそれに当たると考えられる。

ここで境界関係システム (Ris) については、乳幼児健康診査 (以下健診とする) や保育所 (園) や認定こども園に関わる福祉関係の行政機関 (例: 健康増進課や児童家庭課など) や、学校に関わる教育委員会、教育事務所、あるいは就労に関してのハローワークなどがあげられる。

これらのことをまとめると、空間モデルは複数の外部システムと「同時に関わる」横断的な連携を示したものであり、これに対して時間モデルは複数の外部システムと「時間差を持って」関わる縦断的な連携を示したものであるといえよう。実際の連携システム構築に当たっては、これらのモデルに当面する様々なリソース（関係要素）を当てはめることで図形モデル上の視覚化が可能となり、そのことで不足部分についてもまた明確化する。すなわち、関係者はこの作業を通じて連携の在り方を具体的にイメージすることができるようになる。このことによって、これまで試行錯誤的

に行われてきた連携システム構築のアプローチが少しでも効率化することが期待できる。

3. システム教育学の観点から見たコーディネーターの役割

3-1. 空間モデルに関わるコーディネーターの役割

図4は、システム教育学の観点からみたコーディネーターの役割について空間モデルモデルへの当てはめを試みた例である。ここでは対象となる

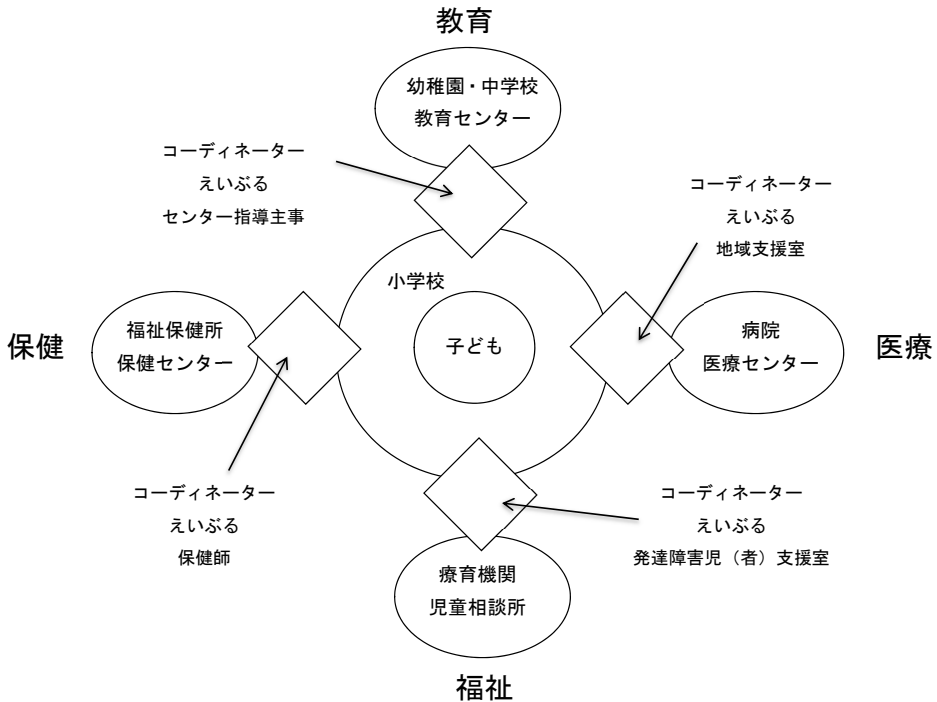


図4. 空間モデルの観点から見たコーディネーターの役割（小学校在籍時の例）

子どもを核（core）に、教育の場である学校（ここでは小学校を例に取る）を内部システム（Is）として位置付ける。一方外部システム（Es）には、教育分野、医療分野、福祉・保健分野などの関係諸機関が位置づけられる。子どもの年齢が進めば労働の分野も外部システムとして位置づけられることもあろう。具体的なりソース例としては、教育分野では時間連携にも関わって幼稚園や

中学校があげられ、行政機関としては教育相談などの対応が受けられる教育センターがその中に含まれる。子どもの障害の程度が重い場合には、特別支援学校も含まれるかもしれない。医療分野では病院はもちろん、地域の医療センターが、福祉分野では児童相談所や県や圏域の療育機関が外部システムとなり得る。乳幼児期の場合に特に関連が深い保健分野では、福祉保健所や健診を受ける

保健センターなどが外部システムとしてあげられよう。ここで境界関係システム (Ris) には、つなぎ役を果たす人的リソースとしてコーディネーターが位置付けられることは言うまでもない。ここでシステム教育学における境界関係システムとは、広義の「媒体」であることから別稿⁹⁾で示したように組織や人などに限定されず、広く捉えるべきものであると考えている。例えば沖縄県教育委員会が推奨している「えいぶる」にみられるようなツール^{13) 14)} はもちろん、場合によっては会議や学校における校務分掌なども広く境界関係システムとして位置付けることができる。ここでえいぶるとは保護者が管理することを原則とする子どもの発達支援ツールであり、拡大版の母子手帳のような役割を果たす。関係諸機関からの情報を

一元的にえいぶるに纏めておくことで、保護者は容易に子どもの実態を他の関係諸機関に提供可能となる。この例では、境界関係システムの具体的な例として、コーディネーターとえいぶるが重要な役割を果たしていることがわかる。その他、医療分野では病院の地域支援室、福祉・保健分野では発達障害児 (者) 支援室や保健師などが境界関係システムの例としてあげられる。

3-2. 時間モデルに関わるコーディネーターの役割

図5は、システム教育学の観点からみたコーディネーターの役割について時間モデルへの当てはめを試みた例である。ここでも対象となる子ども

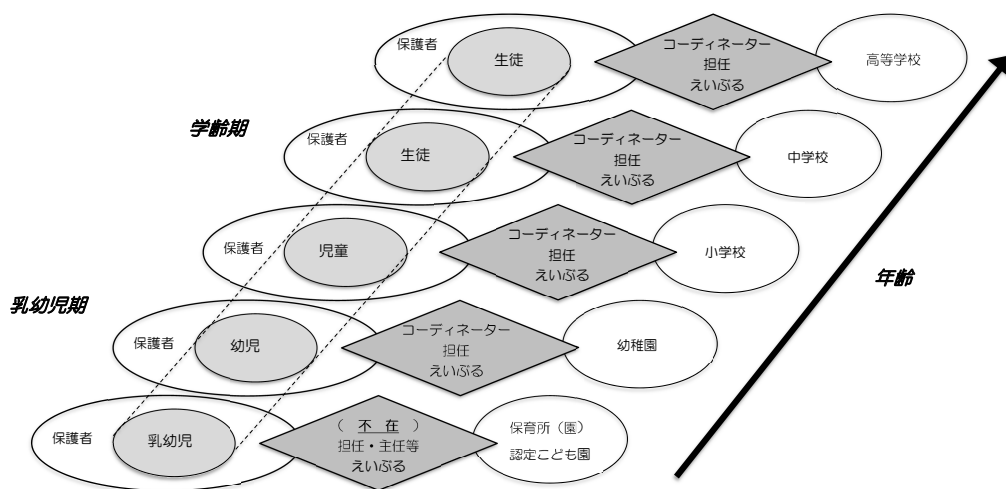


図5. 時間連携の観点から見たコーディネーターの役割 (乳幼児期から高等学校までの例)

を核 (core) に、保護者を内部システム (Is) として位置付ける。ここでは乳幼児期から高等学校在籍までの子どものライフステージを追った例を示す。この例では乳幼児期に関わる外部機関 (Es) として保育所 (園)、幼稚園や認定こども園がリソースとしてあげられる。同様に就学後の学齢期に子どもは義務教育である小学校、中学校、さらに高等学校や特別支援学校などのリソースに在籍することとなる。ここで、これらの学校には校務分掌として必ずコーディネーターが置かれている。特別支援教育の開始以来、小学校・中学校

を皮切りに各学校にコーディネーターが配置され、沖縄県の場合義務教育段階の配置は100%を占めている。この学校におけるコーディネーターは、えいぶるとともに境界関係システムの中核を担うものであり、内部システムとしての保護者が外部システムとしての学校などと連携しながら、核である子どもへの支援を行っていくために欠かせないリソースである。

一方で、保育所 (園) や認定こども園に限ってみれば、学校と同様の役割を果たすコーディネーターが明確に置かれている例はむしろ少ない。通

常、保育所（園）の場合には主任などがその役割を兼務している場合が多いようである。このことは、例えば支援が必要な子どもが保育所（園）に見られた場合、外部機関への繋ぎを誰がどの様に行うか、あるいは地域の相談機関と情報交換する窓口はどこかなどについて明確ではない施設が多いことを示している。療育あるいは教育相談を受ける機関の側から見れば、学校の様子に窓口としてのコーディネーターが明確な場合と、保育所（園）のように施設ごとにまちまちである場合を比較すれば、連携の取り方のスムーズさに限ってみても雲泥の差があるといわざるを得ない。後述するように、将来的には保育所（園）やこれからさらに増加することが見込まれる認定こども園においても、学校と同様にコーディネーターを役割として明確に位置づけることが望ましいと考えられる。

いわゆる「気になる子」といわれる発達障害などが疑われる子どもについて、乳幼児期からの早期発見と早期対応が極めて重要であることはいうまでもない。しかし、在宅はもとより、保育所（園）などにおいても、保育士の目線から客観的な実態把握に基づく早期発見は決して容易ではない。乳幼児に対する健診の場面においても三歳児までには「気になります様子を見ましょう」と保健師からいわれるケースが少なくない。別稿で述べたように、保育所（園）などにおけるプレスクリーニングの可能性については、時間連携の観点からしても今後考慮すべき重要課題の一つといえよう¹¹⁾。これらのことを踏まえて、宮古島市では保育士の資質向上を目指したシステムティックな取り組みを10年近く継続させており、地域における発達障害児（者）支援室「ゆい」の設置なども

相まって、保育所（園）における子ども理解が進み、個々のニーズに応じた対応がなされるようになってきている¹⁰⁾。この宮古島市では、2017年度からさらに新たな試みとして6箇所（園）の公立保育所から1名づつプロジェクトメンバーを募り、担当行政機関である児童家庭課と琉球大学と三者で協同しながら宮古島市の子育て支援を行う「たんぼプロジェクト」を発足させており、今後の成果が期待されている。特別支援学校におけるコーディネーターの資質向上の取り組みについては別稿で指摘したところであるが¹⁵⁾、保育士についてもシステムティックにその資質向上を図ることで、コーディネーターの役割を担える人材を育成することは十分に可能である。認定こども園の設置増加に見られるように、保育所（園）などの就学前のリソースが担う役割は明らかに変化しつつある。上述したように、保育所（園）や認定こども園においては今後コーディネーターの配置について、積極的に考慮することが望ましいと考えられる。

3-3. 境界関係システムとしてのコーディネーター

本研究で示した図形モデルにおいては、例えば子どもを核、学校を内部システムとしたときに、それを取り巻く様々な外部機関（外部システム）とどのように連携すべきか。あるいは外部機関のもつどの部分の役割を境界関係システムとして位置づけるのかが、最も大きなポイントのひとつとなる。これまで述べてきたように、コーディネーターやえいぶるがリソースとして境界関係システムの役割を担っていたことは明白である。ここでコーディネーターの役割として重要なことは、「つなぐ」ということが挙げられよう（図6）。学

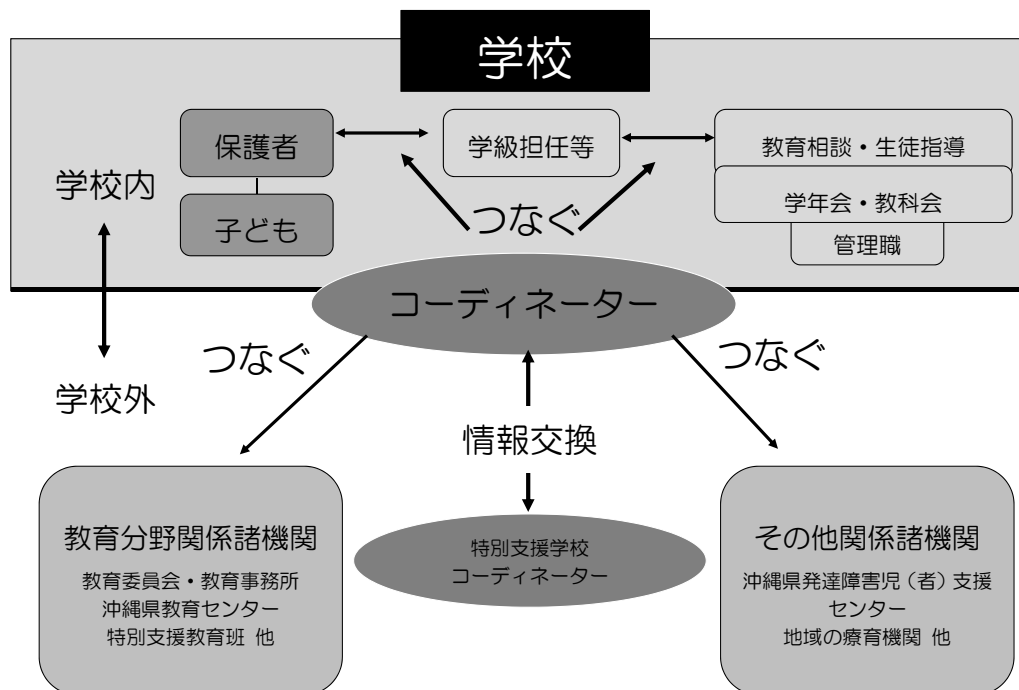


図6. 学校内外におけるコーディネーターの役割

校内でいえば、例えば保護者と担任が直接関わることで直面する課題の解決が難航する場合も考えられる。場合によっては生徒指導や教育相談の校務分掌担当と担任あるいは保護者の間に介入する場合もあるかもしれない。一般論として関係者同士が直接関わることで生じる課題についてはその間に第三者が介入することで緩和される場合も少なくない。このようなコーディネーターの介入についても、「つなぐ」という意味で境界関係システムとしての役割のひとつといえよう。

またコーディネーターは自身が動くというよりは、むしろ直接関わる担任や保護者などの関係者が主体的に動けるようサポートする立場にあることを忘れてはならない。例えば学校外でいえば、関係するリソースはどの程度あるのか、保護者や担任が困った時にはどこに相談すべきか、療育あるいは医療機関にはどのようなものがあるのかなどについて、学校が置かれている地域のレベル、圏域のレベル、都道府県全体のレベル毎に情報を把握しておく必要がある。すなわちコーディネーターは関係する情報を常に最新の状態で把握して、支援する場合にはそのニーズに応じたリソース

に境界関係システムとして「つなぐ」ということが求められる。具体的には、地域にある医療、福祉・保健などに関わるリソースマップを作成して連絡先と役割をまとめておくことも重要な仕事のひとつであろう。さらに各々の関係諸機関が辿ってきた支援の経過などまで共通理解できればさらにスムーズな連携が可能となる¹⁰⁾。地域においてセンター的な役割を果たすことが求められている特別支援学校では、支援部などの校務分掌においてリソースマップを作成して公表しているケースもある。このリソースマップは作成後、情報として保存して関係者と共有できるが、個々のリソースについては適宜その業務内容などの役割を確認し、最新情報に更新していくことも重要である。

最後に、上述したセンター的な役割を果たす特別支援学校にも当然コーディネーターが配置されている^{12) 15)}。コーディネーター同士は、必要に応じて連絡を取り、個別的教育支援計画やえいぶる等を活用しながら密に情報交換を行っておくことが望ましい。例えば沖縄県中部地区のセンター的役割を果たす美咲特別支援学校では、地域の学校の教員に必要な研修機会を提供し、必要に応じて

ケース会議などの支援についても積極的に行っている。学校内だけでは限界がある子どもへの支援については、このような学校外のリソースを効果的に利用することも有効な手段のひとつとなりうる。そのためにも特別支援学校のコーディネーターとの連携は特に重要であろう。

4. まとめ

本研究では、従来試行錯誤的に行われてきた関係諸機関との連携と、子どもの支援に関わるアプローチをより効率化することを目的として、特別支援教育におけるネットワークシステム構築のモデル化を試みている。本研究ではこれらのモデルの試作に当たって、システム工学や経営心理学、社会心理学など積極的に他領域におけるアプローチや考え方を参考にした。本稿ではまず、これまで提案してきた図形モデルを整理した上で再編成し、最初に提案した空間モデルについては改めて基本モデルとして捉え直すこととした。この基本モデルを基に、複数の外部システムと「同時に関わる」横断的な連携に用いる空間モデルを示したが、これは結果的に基本モデルと同一のものとなった。これに対して、複数の外部システムと「時間差を持って」関わる縦断的な連携に用いる時間モデルを示した。このモデルは基本モデルに時間情報を付加したモデルといえる。中でも特に「境界関係システム (Ris)」については、これまで経験的にはなされてきたことであるが、本研究では特に特別支援ネットワークシステム構築の鍵となるべきものと考えている。境界関係システムが果たすべき役割と限界について客観的に認識し、システム構築に当たって常にその存在を考慮しておくことで、今後より効率的なネットワークシステムの構築が可能とならう。

本研究で取り組んでいるこのシステム教育学という考え方は、これまで筆者らが経験的に行ってきた関係諸機関との連携や学校、保育所(園)などにおける子どもや保護者への支援を、いわば「目に見える形にしよう」とする試みである。教師をはじめとして、特別支援教育に携わる人々がこれまで経験的に積み重ねてきたノウハウや方策を「目に見える形」にして他者に伝えることは、

汎用化という観点から極めて重要な作業であると考えている。現在ネットワークシステム構築に携わっている、あるいはこれからその構築に携わる人々が、改めてシステムという観点からその取り組みを明示化することで、より効率的な連携の構築や見通しを持った支援が可能となることを期待している。

謝辞

このシステム教育学の理論構築に当たっては、琉球大学教育学研究科の院生の皆さんとの大学院のゼミや演習における活発な議論がその根底にある。この場を借りて改めて感謝の意を表する。

文献

1. 千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課 千葉県特別支援教育推進基本計画：障害のある子一人一人のライフステージに応じた支援とネットワークの構築を目指して 2007
2. 巖隆志、緒方茂樹 子どもを中心としながら地域と連携をとって進める指導のあり方 国立特殊教育総合研究所 特別研究「自閉症児の早期療育・教育における連携システムに関する研究」成果報告書 112-126頁 1999
3. 国立特殊教育総合研究所編 自閉症児の早期療育・教育における連携システムに関する研究 1999
4. 桑田耕太郎、田尾雅夫 組織論 有斐閣 1998
5. 文部科学省：特別支援教育を推進するための制度と在り方について、2005
6. 室津義定、大場史憲、米澤政昭、藤井進、小木曾望 システム工学 森北出版 2006
7. 中條秀治 組織の概念 文真堂出版 1998
8. 緒方茂樹 宮古圏域における特別支援教育ネットワークシステムの構築 (I) -教育、医療・保健、福祉、労働等に係る戦後の歴史的背景を知る- 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 第14集 81-98頁 2007
9. 緒方茂樹、城間園子、佐和田聡、大城由美子 システム教育学のすすめ -特別支援教育ネットワークシステム構築に向けた空間型、時間型モデルの試作- 琉球大学教育学部紀要 第73集 151-163頁 2008
10. 緒方茂樹、端慶覧定代、砂川ルミ子、与那覇聡美、大城由美子 宮古島市における保育士の資質向上に向けた取り組み -外部システムとしての大学と境界関係システムとしての児童家庭課の機能- 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 第4号 1-13頁 2013

11. 上野愛美、若江ひなた、古謝理恵、城間園子、緒方茂樹 保育場面における子どもの発達と評価に関わる研究 -いわゆる「気になる子」の早期発見・早期対応の可能性- 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 第8号 9-19頁 2017
12. 沖縄県立宮古養護学校 平成16年度沖縄県教育委員会指定 特殊教育 グループ研究報告書「センター的役割を担うためのネットワークづくり -コーディネーターを中心とした教育相談体制のあり方-」、2005
13. 清水祐子、緒方茂樹 特別支援教育における相談支援体制に関する方法論的研究 -サポートノート「えいぶる」の試用を通して- 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 第2号 13-24頁 2011
14. 城間園子、緒方茂樹 特別支援教育における「とぎれない支援システム」の構築 -関係機関における情報交換ツールサポートノート「えいぶる」の作成- 琉球大学教育学部 発達支援教育実践センター紀要 第2号 1-11頁 2011
15. 城間園子、緒方茂樹 特別支援学校における専門性向上のための連携を重視した体制の構築 -特別支援教育コーディネーター資質向上プログラム開発の可能性- 琉球大学教育学研究科 高度教職実践専攻（教職大学院）紀要 第1巻 91-100頁 2017
16. 田尾雅夫 組織の心理学 有斐閣 1999